

第二十四回和辻哲郎文化賞 一般部門受賞作

末延 芳晴 著『正岡子規、従軍す』

(2011年5月25日 平凡社刊)

末延芳晴 すえのぶよしはる 1942年9月29日生まれ。東京都出身。

文芸評論。東京大学文学部中国文学科卒業。一九七三年渡米。ニューヨークに在住すること二十五年。この間、米国の現代音楽・美術・舞踏などについて批評活動を行う。

一九九八年『永井荷風の見たあめりか』を中央公論社より刊行したのを機に日本に帰国。明治期に欧米に留学・遊学した森鷗外や夏目漱石、永井荷風など近代文学者たちが、異文化とのクロスオーバー体験を通してつかみ取ったものをどのように自身の文学精神の中核に据え、作品世界に反映させていったか、徹底した作品解説と資料の読み込みを通して検証。かたわら、森鷗外や正岡子規、国木田独步、島崎藤村、田山花袋、石川啄木などの近代文学者が「書く」ことを通して、いかに国家や戦争と批判的に対峙したか、あるいはしなかったか、日本近代文学の根底にわだかまる矛盾・亀裂に光を当て、二十世紀文学としての可能性と限界を検証することをライフワークとする。主著に『メトロポリタン歌劇場』（音楽之友社）『回想のジョン・ケージ』（音楽之友社）『永井荷風の見たあめりか』（中央公論社）『荷風のあめりか』（平凡社ライブラリー）『荷風とニューヨーク』（青土社）『ラプソディ・イン・ブルー— ガーシュインとジャズ精神の行方』（平凡社）『夏目金之助ロンドンに狂せり』（青土社）『森鷗外と日清・日露戦争』（平凡社）寺田寅彦『バイオリンを弾く物理学者』（平凡社）『正岡子規、従軍す』（平凡社）『アメリカの芸術』（共著／弘文堂）『思い出のカフェ』（共著／Bunkamura）

受賞のことば

このたびは、拙著『正岡子規、従軍す』に対して、和辻哲郎先生のお名前を頂いた名誉ある文化賞を授与下さりまして、大変嬉しく、光栄に思う次第です。

正岡子規は、ひたすら写生をモットーに、「六尺の病床」にあつて筆舌を越えた病苦に耐え、死の不安と闘いながら、俳句や短歌、散文の革命に取り組み、日本近代文学に不滅の足跡を残しました。その正岡子規が、なぜ命を短くすることが分かりながら日清戦争に従軍したのか。なぜ「日本刀の切れ味を／見するはこゝぞ。退くな／斬れ。斬れ。左を斬り払へ／斬れ。斬れ。右を斬り払へ」（「戈」）などと物騒な詩歌を詠み、旧藩主から拝領した刀を背負い、まなじりを決して出陣していったのか。そしてわずかに一ヶ月半という短い従軍生活であったものの、遼東半島に渡って何を見て、何を書き、戦争についてどう考えたのか。本書は、これまで明らかにされてこなかった子規文学をめぐる最大の謎について、「失われた共同性を求めて」というコンセプトによって、子規のテキスト、およ

び関連資料を徹底的に読み込むことで解明しようとしたものであります。

子規文学の「陰」の部分に光を当てた本書に対して本賞が授与されたことで、今後、日本近代文学の根底にわだかまる矛盾・亀裂を検証する仕事を続けていくうえで、大いに勇気づけられるものを感じております。本当にありがとうございました。

《選考委員評》

梅原 猛

私は最終候補となった四作をかなり熱心に読み、今回の和辻哲郎文化賞は末延芳晴氏の『正岡子規、従軍す』以外にはないと思って選考委員会に臨んだ。ところが私の予想に反して全員が末延氏の作品を推し、わずかに約十分で選考を終えた。

末延氏の作品は以前にも和辻哲郎文化賞の候補になったことがあり、私は氏の作品として『夏目金之助 ロンドンに狂せり』と『寺田寅彦 バイオリンを弾く物理学者』の二作を読んでいた。いずれも微に入り細をうがった調査にもとづく力作であったが、私には、氏の問題意識の所在がもうひとつつかめなかった。しかし今回の受賞作は問題意識が甚だ鮮明で、しかも子規を論じる他の批評家がほとんど触れない点に鋭く触れていた。

われわれは正岡子規を俳人あるいは歌人として認識しているが、子規はまさしく新聞「日本」の記者であった。彼は日清戦争後の中国を視察したが、そこで中国は子規の目にどう映ったのか。

末延氏は、ふつう子規論ではあまり問題とされない彼の戦争を詠んだ文章、新体詩、特に漢詩に目をつけて、そこに子規の戦争に対する態度をみるのである。そこには戦いに敗れて悲惨な生活をしながらもたくましく生きる中国人を描いたものもあるが、主なものは、戦争で負けた中国人を侮蔑し、日本の輝かしい勝利を称えた文である。末延氏はこの子規の姿に、その後の日露戦争、日中戦争及び太平洋戦争における知識人の戦争に対する態度の先駆をみるのである。

このような末延氏の子規に対する見解は、司馬遼太郎原作のNHKスペシャルドラマ「坂の上の雲」によって現在、日本人の間で定説化されつつある子規に対する見方とは根本的に異なる。

末延氏はまた、子規はこの従軍体験の旅の終わりに咯血し、残りの人生が短いを知って俳句及び短歌の革命に命をかけるようになったと論じる。この指摘も興味深い。

山折 哲雄

子規といえば、さしずめ短歌、俳句の革新である。さらに子規の人生を語ることになれば、晩年の「六尺の病牀」である。そこで七転八倒する子規の姿である。けれども著者は、

はじめからそのような常套の道をふまない。安易に得点を稼ぐことが嫌なのだろう。だから、それを禁じ手にして

正岡子規、従軍す

と、決然という。子規はなぜ日清戦争に従軍したのかと問い、かれにかんする「断簡零墨」のはてにまで目をさらし、その生涯の事業を見渡そうとしている。著者の自信あふれる出発点だ。

明治革命で、それまでの武士たちは身分をみずから捨て、あるいは剥奪された。士族の末裔として田舎の松山から新都・東京に出てきた子規も、その例にもれない。かれはそのとき、すでに何者でもなかった。だから、何者かにならなければならなかった。それで大学予備門に入るが、たちまち挫折して、気がつく。まず日本人にならなければならないのだ、と。そのときの子規覚醒の質は、ほとんど同時代の内村鑑三のそれに酷似する。明治青年の精神の核をゆるがすナショナリズムの発動である。圧巻はやはり、従軍によってえた子規の咯血体験。そして従軍漢詩の制作を通して俳句言語に開眼していくプロセスの解明、という仕事だろう。

著者の末延芳晴氏は、東大の中国文学科を出て渡米し、ニューヨークに15年滞在してアメリカの現代芸術について批評活動を展開した経歴をもつ。氏もまた何者かになろうとして太平洋を渡ったにちがいない。帰国後の仕事は、やがて漱石、鷗外、荷風の海外体験に焦点をしばり、戦争や植民地にたいするかれらの深層意識の追究へと推移していった。近代日本の光と影を一貫して浮き彫りにしようとしてきたとあっていい。その氏の不動の意志と情熱が、本書にも受けつがれているのである。

阿刀田 高

末延芳晴さんは、これまでに『寺田寅彦 バイオリンを弾く物理学者』や『夏目金之助 ロンドンに狂せり』『森鷗外と日清・日露戦争』など作家のある時期に焦点をすえ、資料豊かにその時期の作家のありようをつまびらかにしながら、同時に抜かりなく作家のひとと文学の全貌を描くという方法を駆使して優れた評伝を上梓されてきたように思う。今回の『正岡子規、従軍す』も自家薬籠中の方法を用いて、なぜ子規が命を賭してまで戦の終わった戦場に赴いたか、丹念に実情を綴って作家の志を明らかにし、あわせてそれが文学者のなにを表わしているか、明解に展望している。

総じてとても読みやすい。研究書によく見られる難解さが無いのがうれしい。ページを繰りながら、

「子規とはこういう人だったのか」

広く読者に伝わることも文化賞にとって大切なことだ、と私は思う。

巻末近くで、一つの結論とも思うのだが、「共同性」というコンセプトを提示し、

”今、錯綜し合うように複雑かつ重層的な構造体として世界を蔽う共同性を、その実体、あるいは特性に即して大きく類別すると、親子とか夫婦、恋人の關係に象徴される、もっともベーシックな共同關係としての^{ついで}對關係共同性と、そのうえに構築される学校とか職場、地域コミュニティ、年齢・社会階層など、それぞれ別個に独立した共同体を貫く特殊集合關係共同性、さらに民族や国家、言語、歴史、文化、宗教など特殊集合關係共同性を統括する形で構築される上部構造としての全体共同性、そしてこれら三つの共同性を包摂・統括して、全宇宙的、全地球的、全人類のレベルで貫徹する真理とか原理、法則、美、道德倫理、理念などに象徴される普遍共同性と四つに分けられるだろう”

として子規の折々の多様性を説いているくだりは、すこぶる示唆的であり、興味深く読むことができた。

私にとっては初めての選考会であったが、驥尾に付して迷いなく推薦ができたのは、さいわいであった。おめでとうございます。